

---

# 夢の世界

tasogare

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢の世界

### 【Nコード】

N2642D

### 【作者名】

tasogare

### 【あらすじ】

『主人公』柳田祐治ヤナギタユウジは、県にある私立高校の「流石高校」に通う、現在高校二年生。性格が明るい、ごく普通の高校生である。部活動は無所属で、学校帰りには、ほぼ毎日友達と寄り道をする。ある日、その寄り道先で……。この小説は、何の変哲もない高校生が、ある日突然、剣術を知る。魔法を使う。敵を射抜く。怪物を倒す。作者である自分自身が、こんなことを出来たらいいな、と思ひ、書いた物語です。

## 第一話：放課後

目の前に迫る鋭い爪。だが遅い。俺は光の如くかわす。目の前にいるのは、黒く巨大な鷹<sup>タカ</sup>。隙のできた鷹に、手に持つ短剣を深く突き刺す。さらにもう片手の短剣で鷹の首を断ち切る。鳴き叫ぶ鷹。辺りが鮮やかな赤色で染まる。しかし、鷹は生きていた。何故だ。俺は判断を遅らせてしまった。鷹は大きな足で俺を掴み、そのまま俺を握りつぶす。もはや全く力が入らない。

背後で俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。誰だろう。分からない・・・がひどく申し訳ない気持ちがある。もう返事もできない。負けた。もの凄い敗北感に満ち溢れる。そして、俺は静かに眼を閉じた。

はっ！と目が覚めた。悪夢だった。ゲーム好きの俺はグロ画や、血液が飛び散るのを平気で見られる。だが今回は、あまりにもリアル過ぎて気分が悪い。正直吐きそうだ。

ふと気づく。今は・・・授業中？そうだ俺は寝てしまっていたのだ。それにしても気分が悪い。しかも、なんだろう、この気怠さ・・・。

とりあえず記憶の整理をしよう。俺の記憶は三限目のなかばから怪しいが・・・、今はどうやら四限目らしい。教室内では黒板の板書をカリカリとノートに書き写すやつ、机に伏して豪快に眠るやつ、ペン回しの練習をするやつ。様々だ。そんな中、先生は教壇の上で必死に喋り、黒い板を白い文字でいっぱいにする。そして俺は、さつきから上の空だ。さっきの夢は何だったのだろう。思い出しただけで何故か切なくなる。

ふと窓の外を眺める。

上を見れば、青い広大な空が広がる。今の俺の気持ちの色とは全く正反対だ。しかし、こんなに落ち込む意味が無いのでは、と気づく。そもそも夢じゃないか。俺は少しずつ気持ちを落ち着かせていった。雲一つ無い青空を見ると、何故かいつになく落ち着ける自分が居た。自分が惹かれていった何かを感じた。しばらく眺めるうちに、気分がすっきりし、既に夢で何を見たのかさえ忘れていた。

大きな空の下で、今日も街が時を刻んでいる。もちろん俺の気持ちなんて関係なく。街が小さく見えたが、そんな中に居る自分をもっと小さく感じた。相反し、小鳥たちが囀りながら、大きな空を自由に飛び交う。鳥は自由でいいよな。「鳥になりたい・・・」とはまさにこの気持ちのことなのだろう。俺はこんなに小さな世界で小さく生きて、朽ちていくのか・・・。

はかない・・・。

キンコーンカーンコーン。

(あ、終わっちゃったww)

先生「じゃあ授業はここまで。気をつけて帰るように。はい、号令。」

学級委員長「起立。礼々。」

今日は四限目で学校が終了のため、これで放課だ。

クラス内がいつも以上に賑やかになり、仲の良いもの同士がグループを作り始める。そして、男子が集まり昼食をとり始める。一方では、女子が集まり大騒ぎする。

ガヤガヤ、キヤーキヤー、ジャアナー、キヤツキヤツ！

キヤハハ、ワツシヨイワツシヨイツ、キヤハハハ

なんか、ワツシヨイ言ってるけど……。まあ、いい。

それにしても、あの子……。かわいいなあ。

目線の先には一人のはしゃぐ女の子。時折吹く秋風に揺れる艶やかで茶髪がかった少し短めの髪。整った顔に優しい目。わずかにボーイッシュではあるが、笑顔は輝き、見る者を虜にする。あれはきつと魔法なのだろう。あらゆるものを包み込み癒す。今、俺には彼女がそんな風に思えた。はあ……。届かない想い……。どうやったら彼女と仲良ku……

????「一緒に帰るか？」

誰かが不意に、肩にポンと手を置く。

ユウジ「お！お、おう、帰るか。」

振り向くと、肩に手を置かれ焦りまくる俺、を不思議そうに見る友人。

???「ん・・・どうしたんだ？」

ユウジ「誰かと思えば。いきなり声かけんなよな。立ち悪いなあ。」

???「立ち悪いのはどつちだよ女の子をジロジロ見て・・・。  
なんだあ？あの子が好きna・・・？」

ユウジ「んなこたぁいいだろ、帰る帰る。」

俺は慌てて彼の言葉をかき消す。顔が熱い・・・。

???「別にいいじゃん。あいつ可愛いし。俺はいいと思うぞ。」

彼の名前は『夜星<sup>ヤホシ</sup> 満<sup>ミツル</sup>』。俺の幼馴染であり、親友である。彼はいつも冷静。そして、正直者でいいやつだ。毎回いろいろと思いがけない発言をするため困らされるのだが、今回は俺に気を使ってくれたらしい。

ユウジ「まあ、追い追いだな。さて帰るか。」

ミツル「そうするか。んー。でも、家に帰っても暇だな・・・。あつ、祐治。ゲーセン行かないか？この前、いい所見つけたんだ。」

ユウジ「マジか。行く行く！」

ミツル「ノリ気だな。そう決まったら早く行くぞ。」

俺達は自転車を取りに駐輪場へ向かう。自分の自転車を見つけると鍵をはずしゲームセンターへ向かう準備をする。

ミツル「祐治。早くしてくれよ。」

向こうを見ると満は既に準備を済ませ、自転車に乗っていた。

ユウジ「スマン、スマン。今行く。」

澄み切った青い空。ポカポカと照る太陽。  
とても気分が良い。

俺は急いで友達の元へ向かう。

## 第二話：ゲームセンター

ミツル「まったく。早く行くぞ。」

満が出発し、俺が追いかける。

ユウジ「ちょ、早い。早いつてば。」

ミツル「早く着きたいしな。」

ユウジ「でも、友達置いていくなんて・・・酷いことしてくれるじやん?」

ミツル「まあ、追いついたんだから、いいじゃないか。」

ユウジ（ひでえこいつ・・・）

満はいいやつだが正直すぎるところが傷だった。だが慣れている俺は軽く流す。二人はしばらく無言になり自転車をこぐ。風が心地よい。そして、満が口を開く。

ミツル「もうそろそろだな。学校から10分で着くからな。」

学校を出てから結構経ったように感じる。やはり、もう少しなのだろう。しかし、この近くにゲームセンターがあるなんて聞いたことがない。そして、たずねる。

ユウジ「そうか」。だけど、この近くにゲームセンターがあるなんて初耳だよ。」



ミツル「この前できたばかりなんだ。一人で行ったときは、コインゲームに没頭してしまった。結構楽しめるぞ。」

めったに笑わない満が笑った。そのゲームが相当楽しいのだろうと思う、があえてつつこむ。

ユウジ「一人でコインゲーム寂し過ぎw」

ミツル「まあ、暇だったからな。」

ユウジ「ふん。楽しみだな。」

ミツル「着いたぞ。ここだ。」

ユウジ「・・・!」

いきなり目の前に現れた建物に驚いた。

ユウジ「満・・・。ここなのか?」

ミツル「そうだ。どうした?」

俺は見とれていた。こんな田舎に、こんなに大きなゲームセンターがあつていいのか、と思う。外装は真っ白で綺麗だ。ガラス張りで店内が見える。もちろんガラスはピカピカだ。俺の『ゲーム魂』が早く中に入れと叫び続ける。まてまて、落ち着け。そして、もう一度建物を見渡す。

ミッル「大きいよな。中も凄いし早く入ろう。」

ユウジ「お、おう。」

気持ちが高ぶってきた。やばい！

建物へと進む俺と満！

微かに聞こえるゲームのBGM！  
見えるっ！賑わう店内があああ！

明らかに興奮しすぎです。

そして、自動ドアが開き中に入る。あらゆるBGMが混ざり合い、  
ゲームセンター特有の雰囲気を作り出す。

俺は店内を見渡す。UFOキャッチャーが目の前に。そして、右手にはレーシングゲーム。その奥にシューティングゲーム。左手にはコインゲーム。その奥にはプリクラを撮る機械が、ザッと十数台ずつ、いや、それ以上置かれている。一番奥には階段とフロントがあり、どうやらその先に行くとカラオケができるようになっていらしい。

俺達はしばらく店内を歩いた。

賞品である大きなぬいぐるみを見て、誘惑させられたり、『今流行りの3Dのシューティング！』などの宣伝文句に目を奪われる。はたまた、『全国各地のプレイヤーとリアルタイムでレーシング対決！』などなど。このゲームセンターは一体何なんだ。斬新かつ面白すぎる。

そして、しばらく歩いて気づく。  
妙だ……。

人が居ない。

時間も時間だ。まだ午後一時。おおその人が学校であったり仕事であつたりで、一番人が居ない時間帯だろう。だが……店員すら居ない。何故だろう。ふと不安になり満に訊く。

ユウジ「客も店員も居ないけど、大丈夫なのか？」

ミツル「確かにそうも思うけど、この前も人が居なかったんだ。まあ、遊び放題でいいじゃないか。」

ユウジ（この前もって……。本当に大丈夫なのか？）

いやな予感を抱きながら歩く俺。おかまいなしに進む満。まあ、考えてても仕方無いし思い切り遊ぼう。そう結論を出した。まさにその時、満の声がした。

ミツル「来てくれ。これをしよう。」

俺と満はすっかり離れてしまっている。近づいて行くと、そこには四角の箱が3つ並んでいた。そして側面に何やら説明が書いてある。

『World of Dream（夢の世界）』

「新作！！バーチャルな世界へ、あなたをご招待します！！」

長年ゲームをやってきた俺だが、一瞬で神ゲーだと悟った。そして続く説明を見る。なにになに・・・1プレイ300円。高くないか？まあいい。ヘルメットをかぶり目をつぶると、脳に電気信号が送られ、バーチャルな世界へと飛び立つことが出来る。

ユウジ「まじかよ・・・。満、これ凄すぎじゃね？」

ミツル「そうだな。早く入ろう。」

満が冷血に言う。

ユウジ（冷めてやがるなあ・・・。）「おつ。」

### 第三話：説明

ドアはスライドドアだ。それを開き、俺と満はゲーム機の中に入る。箱の中は意外とシンプルだった。中は意外と広く、4つの斜めがあった席ある。頭の近くにはコードの付いたヘルメットらしきものが各々取り付けられていて手掛けまで取り付けられている。

俺達が席に座ると、正面の画面に文字が浮かんだ。

ユウジ「ん・・・？」

本日は『夢の世界』をプレイしていただき、ありがとうございます。これからの説明をよくお読みになってからプレイして下さい。

ザザアーガガッ

突然画面が歪み、砂嵐が表示される。そして黒い背景に白い文字が浮かぶ。

「説明1」

プレイ中は外界から何をされても、何も感じなくなってしまう。ドアには鍵が付いています。必ず鍵をお掛けになってからお楽しみ下さい。

ユウジ「なんか、本格的だな。」

ミツル「そうだな。」

ザザアーガガッ

「説明2」

このゲームは最大4人で楽しめます。全員でストーリーを進めていきます。

ザザアーガガッ

「説明3」

プレイヤーが一人でも欠けるとゲームオーバーです。

ザザアーガガッ

「説明4」

誰かが負けると同時に、ゲームが終了して自分の世界に戻ります。その後軽い電気ショックが流れます。

ユウジ「製作者絶対Sだよな。電気ショックいらね〜。」

ミツル「まあ、罰ゲームか何かだろ。これだけ面白いゲームなら仕方ない。」

ユウジ「そうだな。」

ミツル「これは見るからに神ゲーだな。」

ユウジ「俺も思った。満〜、足引っ張るなよ〜?」

ミツル「ぬ。それはこっちの台詞だ。」

ユウジ「じゃ、始めよ。300円っつと。」

俺は投入口にお金を入れる。続けて満も入れた。

ミツル「300円。よし。」

ユウジ「ヘルメットと・・・。」

祐治と満がヘルメットをかぶると、二人を睡魔が襲う。そして、しばらくすると、二人は完全に眠りについた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2642d/>

---

夢の世界

2010年10月8日23時55分発行